男たちの肖像

佐藤愛子

男たちの肖像

佐藤愛子

集英社

男たちの肖像

一九八三年 三 月二五日 第一刷発行

定 価 九八〇円

著 者 佐藤愛子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一
電話 出版部 (〇三) 二三八―二八四二
販売部 (〇三) 二三〇―六一七一
印刷所 大日本印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© AIKO SATO 1983 Printed in Japan

ISBN4-08-772424-7 C0093

目次

先生と呼ばれる女 5
少年 39
罰 77
愛の軌道 110
予感 147
渦 167
鎖の重さ 203
失ってゆくもの 226
決意 265

裝幀　灘本唯人

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

男たちの肖像

先生と呼ばれる女

1

村彦次と三宅仲子の間には頑丈な樫のテーブルがあり、ストーブにはまだ早い季節なのだが、九月はじめの長雨で肌寒い日が続いた、この時に慌てて出した石油ストーブが立っている。そしてその一方で部屋隅の三角台にまだ扇風機が置かれていた。

仲子の後ろの壁にボンボン時計が懸っている。ボンボン時計の下に、診療時間や休日を示す貼紙(はりがみ)がある。それから誰が懸けたのか（仲子は知らないが）ゴッホのハネ橋の複製が懸っている。

村は仲子の後ろの壁の方へ、ときどき視線を走らせた。「ハネ橋」を見ているのか、時間を見ているのか。時計に視線を当てていることを仲子に気どられまいとして、さりげなさを装っているようでもあり、そうではないようにも見える。そんなふうに考える自分の心を、もうひとつの仲子の心が見ている。こういうことは、推測する方の感情によって決るものだ、と思う。

「もう少し、いいですか、先生」

と村はいう。そんなこと、いちいちいわなくてもいいのに、と仲子はいつものように思う。改めてそんなふうにいわれるのは仲子はいやである。そう訊(き)かれたとき、どういう顔をすればいいのか、仲子は困る。そのため、

「ええ、よろしいの、どうぞ」
と答える時の自分の顔が、却って素気なくなってしまうことを意識するのであった。
村は安心したように話しはじめる。翌日になってからいつも思うことだが、村がどんな話をしたのか仲子には思い出すことが出来ない。多分、仲子は村の話をよく聞いていないのだ。
――この人はなぜ帰らないのだろう？　来ると、なぜ長居をするのだろう？
そんなことを仲子は考えている。
村が自分と話をすることに何らかの意義か喜びかを感じているのだとは仲子には思えない。いや、そうだと思うことを妨げようとする意識がある。
村はやって来ると夜中の一時までいる。一時になると、
「あ、もう、こんな時間ですか」
と驚いたようにいって腰を上げる。まるでそれが、自分に与えられたぎりぎりの許容時間であるかのように。
「お邪魔しました。いつも伺うと長居をしてしまって……申しわけありません」
礼儀正しく頭を下げて帰って行く。
なぜ一時なのか？
なぜ十二時でも二時でもないのか？
村がしゃべっている言葉を音楽のように聞きながら、仲子はそんなことを考える。一時までなら彼の妻は文句をいわないというのだろうか？
十二時ではまだしゃべり足りないというのか？
「私はいいのよ、明日は日曜ですから。ゆっくりなさって」
とは仲子は一度もいったことがない。本当はその言葉を口に出したくて心臓がドキドキするほどだ。

だが、いや、だから、仲子はそれをいわない。そんな自分の心も、仲子はずーっと見つめつづけて来た。

樫のテーブルの上には古雑誌やめくれ癖のついた週刊誌が重なっている。灰皿には村がやたらに吸うタバコの吸殻が山になっている。立ち上って灰皿を取り換えなければ、と仲子は思う。しかし仲子がそうすると、村は吸殻の山が語っている長居の時間に気がついて帰ろうとするだろう。だから仲子はじっとしている。

「このテーブル、父が開業したときにいただいたものなんです。ですからもう五十年以上になります」

唐突に仲子がいったのは、村の話がとぎれて、急に二人の間に空白がひろがったからだ。

「ひどいでしょう。傷だらけで。この傷は兄が父に叱られて、怒って銅の文鎮を叩きつけた時の痕(あと)ですわ。これを下さった方はヨーロッパ帰りの気鋭の外科医で、待合室用にと長椅子も一緒に下さったんですけれどね、こんな下町のちっぽけな医院ですもの、その頃は待合室なんてなかったんです。玄関が待合室でしたのよ。ですからはじめは兄と私の共同の勉強机になっていましたわ。おかげで傷だらけ」

「ハートに矢が刺さっていますね」

「それも兄のわるさです。Sってあるでしょう。兄が好きだった女学生のイニシャルなの」

村は笑った。笑うと現れる目尻の笑い皺が仲子は好きだ。

「父のいる間はとうとう、このテーブルは待合室には使えませんでしたわ」

仲子はいった。

「患者は玄関に入りきれないほど毎日来ているのに、少しもお金が溜らなかったんですもの。待合室を作ったのは私の代になってからです」

「〝深川の赤ヒゲ先生〟といわれた方なんだそうですね」
「医は仁術、を実践した人ですから。ですからね、このへんの古い人たちは、その娘だというのでこの私も仁術をほどこすものと思いこんでいるので迷惑します」
村はまた笑い、タバコを取りだす。村がタバコに火をつけるのをしゃべりながら仲子は見ている。おっつけ時計が一時を指そうとしていることを仲子はさっきから知っているのだ。しかし、タバコに火をつけたのだから、彼はまだ帰る気にはなっていないのだろう。仲子の胸に安心が拡がり、新しいコーヒーをいれるために立ち上る気になる。

「ごめんなさいね、私、コーヒー、上手にいれられないのよ」
仲子は村にコーヒーを出す時、いつも決ってそういわずにはいられない。仲子はコーヒーもいれられないし、味噌汁も上手に作れない。
「いや、いいんです。ぼくはインスタントで十分なんです。うちの女房は机の上にポットと砂糖とインスタントコーヒーの瓶を置いて行ってしまいますからね。いれてもらったことなんか一度もありません」
村の妻冨子はもとは彼が講師をしている大学の英文科の学生だった。卒業と同時に結婚して、今は小さな出版社に勤めている。仲子が村と知り合ったのは、冨子のクラスメイトであり、村の教え子でもある桜庭陽子が妊娠したことで相談を受けたのが最初である。
そのとき、仲子は村が桜庭陽子を妊娠させた男だと思い込んでしまった。村は自分は仲子の医院から近いアパートに住んでいる者であると自己紹介し、口ごもりながら桜庭陽子の妊娠の処置を仲子に頼んだのだった。
「女の先生じゃないとどうしてもイヤだというものですから……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

額の汗を拭いたそのハンカチが、独身の男らしくクシャクシャだったことを仲子は憶えている。
「どうして結婚なさらないんですか？」
仲子は持前のぶっきらぼうな口調でいった。
「いずれは結婚するおつもりなんでしょう？　そうじゃないんですか？」
「は？」
村は怒ったような仲子の目を見返し、仲子の誤解を察した。
「いや、ぼくは」
といいかけるのに、
「身籠った子供を処置することを、美容院で髪型を変えることみたいに考えていらっしゃるのね」
といいかぶせた。
「最初の妊娠を中絶すると、後々、不妊になる可能性が大きいんですよ。それでもよろしいの？」
仲子の見幕に村は、「いや、その」といったきり後がつづかなかった。
「結婚なさっては？　人間は自分のしたことに対して責任をとるものですよ」
「はあ……し、しかし……」
村は仲子の性急な誤解に腹を立てるよりも、むしろ辟易して吃った。
「ぼ、ぼくは……こ、この……桜庭君の教師でして……」
それがどうしたの？　という顔で仲子は村を見た。そこまでいってもまだ仲子は村を、桜庭陽子を身籠らせた男だと思いこんでいたのだ。
桜庭陽子の中絶手術の日も退院の日も村は来た。
「ずいぶん親切な先生ねえ。いっそ、結婚してあげれば？」
中絶の費用の半分を来月まわしにしてくれと頼みに来た村に向って、仲子はそういってからかった。

「はあ？……はあ……いやそれは……」
そういって蒼惶と帰って行った村を、ふと微笑ましく思ったこともはっきり憶えている。
「先生、村さんのカノジョは桜庭さんじゃありませんよ。もう一人のひと……ほら退院の日に一緒に来た、色の黒い、活発な……あの人です」
村が帰った後、看護婦の友野がそういった。
「昨日、あの人と手をつないで銭湯から帰ってくるのを見ましたわ」
「銭湯から？」
「ええ、二人とも手拭いと石鹸を持ってましたもの」
「じゃあ、結婚してるの？」
「じゃないでしょう。先生、独身ですかと訊きましたら、そうですっていってらっしゃいました」
「もう暮してるのね、一緒に」
「らしいですね」
友野のその返事が、仲子の胸に拡げた重苦しい感覚も仲子は憶えている。
あの時から五年経つ。仲子の誤解が村と仲子を親しくさせた。その後、長男の強が英語の宿題で困っていた時、ふと思い出して村のところへ教わりに行かせた、そのことも村と親しさを深めた理由のひとつになっている。
その時は中学一年だった強は、今高校二年になった。小学生だった娘の梓はあの時の強の年に近くなった。強も梓もときどき、村に英語の勉強を見てもらいに行く。子供たちの方から出かけることもあるし、村が来てくれることもある。
だが子供たちの父親がいないのはどういうわけなのか、村はまだ知らなかった。三宅医院という名は、古くからいる町の人には馴染み深い名前である。仲子の父が内科外科耳鼻科に産婦人科もやる町

医者として四十年間開業していた後、仲子が継いで十四年になる。
先生はご主人と死別されたのか離婚したのか、とときどき患者同士が待合室で話している。
「でもねえ、八百政のおばあちゃんはこういってるのよ。古くから出入してるけど仲子さんが嫁入りしたって話は聞かなかった、って……」
「でもね、大先生がまだお元気だった頃ね、しばらく病院勤めをしてから、無医村だか何だかに行ってたってね。三年だか四年だか、ここにはいなかった頃があるそうよ、その時じゃないの」
「結婚したの？」
「そう、それ以外には考えられないのよ」
「親の許さぬ結婚だったかもね」
「どうしたんだろうねえ、ご主人は」
「別れたんじゃないの、産婦人科の女医ってのは結婚生活に向かないっていうからねえ」
「そうかねえ」
下町らしく遠慮していた小声がだんだん大きくなって仲子の耳にまで届くことがある。
「あなたたちねえ、人の噂話するときは、噂の主に聞えないようにいうものよ」
内診台に上った患者に向って仲子はそういいながら内診をはじめる。
「あっ、先生、聞えてましたか」
「婦人科の女医はほんとに可哀そうよ。結婚生活に向かないもんだから、こんなことさせられる。人がさんざん楽しんだ跡始末をさせられたりね」
「アラいやだ、先生……」
「ハイ、いいですよ、大分快くなってるわ。でも、アッチの方はもうしばらく我慢してね」
闊達にものをいうことを心がけるようになって十年になる。好きで選んだ仕事ではなかったが、今

では人から「先生」といわれ、相応の振舞いをするようになった。
「どうして産婦人科なんか選んだんですか？　女医さんなら眼科とか皮膚科とかがよろしいんでしょうに」
よく人から訊かれて来た。その度に答える言葉は決っていた。
「お金がほしかったんですよ」
強が生れた後、仲子は母に強を預けて長野県の無医村で働いていた。その頃千葉県の市立病院の内科の副医長だった兄が急死した。それが仲子の事情を変えた。仲子は、急に健康に衰えを見せはじめた父を助け、強を養うために家へ帰って来たのだった。
「とにかくお金がほしかったんですよ。あの頃は荒稼ぎの出来た時代ですから」
わざと露悪的にいった。それにつづけて、
――それに、その頃、人をモノとして見たいという気持が強かったのです……
と胸の奥から言葉がせり上って来るが、それを口に出したことはなかった。

村が視線を向けた時計が午前一時を大分廻っていることに、仲子は前から気がついていた。
「実は先生、今夜はお願いがあるんですが」
心を決めたように村がいい出した。
「何ですの？」
仲子は急に改まった村に微笑を返しながらいった。
「また教え子の妊娠？」
「いや、違います。女房です」
村はいった。

「気をつけていたんですが、どうも出来ちゃったらしいんです」
仲子は口を噤んだ。
「それで……」
村は口ごもって仲子を見た。
「それで？」
「実はうちの女房は元気そうに見えるんですが、子供の時から腎臓が悪いんです。女房の母親も腎臓で若くて死んでいます。妊娠中毒を起しまして……」
何もいわず、仲子は口ごもる村を見ていた。急に村が全く別の生々しい男に見えた。
村にも他の男と同様、性生活があることをなぜかこれまで仲子は考えたことがなかったのだ。村は仲子の家へ出入するようになってから間もなく、冨子と結婚式を挙げた。そのとき、仲子はコーヒーセットを結婚祝いとして贈っている。結婚すれば妻が妊娠するのは当然のことなのだ。
「それで冨子は神経質になっていまして、妊娠をとても怖がっていたんです。一種のノイローゼだと思うんですが、ですから……」
いいにくそうにいう村のその広い額の生え際を見つめたまま、仲子はまだ何もいわなかった。
「ぼくたちは、いわゆる……普通の夫婦とは少しちがうと思います。そのう……性生活が、です」
「あなたは禁欲を強いられていたってわけ？」
「いやそれは……ぼくだって男ですから……」
いつもはおとなしい村の目に、強い、きかぬ気らしい光が一瞬宿った。
「そうそう女房のいいなりになっていたわけじゃありませんが」
「無理強いをして、失敗した……？」
村は苦笑して肯定した。

「失敗しました……」
仲子は黙った。仲子の中に燃え立って来るものがあることに気づかず、村はいった。
「先生、中絶していただくわけにはまいりませんか」
村は頭を下げた。
「お願いします」
仲子はしばらくの間黙って村を眺め、言葉を探していた。仲子の胸底に激情の前ぶれともいうべき微動がはじまっている。
「子供の時からの腎臓病っていったって、だから妊娠中毒にかかって死ぬとは決りませんよ。医学は進歩していますからねえ。奥さんのお母さんの時代とは違います。一度、内科で精密検査をなさればいいじゃありませんか。処置するかどうかはその後で決めることでしょう？」
出来るだけ無表情にいった。
「それは……ぼくもそう思います。しかし……女房には通用しないんです」
「どうして？　まるで明治時代の女のようなことをおっしゃるのね」
「女房は子供を産みたくないんです……もしかしたら腎臓の持病がなくてもいやなんじゃないかと思えるくらいなんです」
「どうして？　子供が嫌いなの？」
「嫌いというより、彼女は仕事の鬼なんです。子供が生れることで仕事に支障が生じるのがいやなんじゃないかと思うんです」
仲子は不機嫌を隠そうとせずにいった。
「じゃ、なぜ結婚なさったんですか、奥さんは……」
そういうと口もとに嘲笑が浮き出た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com